

随 筆

富士ダイス株式会社
執行役員 技術開発本部 副本部長
篠宮 護

フィッシングオン

水面から伸びたラインを通じ、伝わる生体反応（魚信）の感触は、釣りをしたことがある人なら容易にイメージできるであろう。集中していいと気付かない小さなアタリから、ひたたくような豪快なものまで、魚種によってその反応はさまざまだ。

初めて釣り糸を垂れたのは、小学校低学年くらいだったかと思う。仲の良かった友人達と毎週近



河口湖にて

所の小川に小鮒釣りに通っていた記憶がある。先行で釣り場に行った地元の人達から、投げるときは後ろを確認するといった基本的な釣りのマナーを教えてもらったことは今も財産だ。年を重ねるごとに、川から湖、そして海へとフィールドが広がった。

あれから四十年。今でも真冬以外はロッドをもって各フィールドへ出かけ、魚種を問わず

さまざまな釣りを経験してきたが、中でもバスフィッシングには熱中した。約二十年前に、芸能人がテレビを通じて紹介したこともあり、その当時一大ブームが到来した。関東フィールドの聖地と言われる河口湖は、週末ともなれば釣り人で溢れかえっていた。バスフィッシングは餌を使用せず、ルアーと呼ばれる一方、私の偏見もあるが、流行に乗るためだけにバスフィッシングから釣りを始めたビギナーも多く、一部にマンナーの悪い釣り人も多かった印象

疑似餌を用いる。木材やプラスチックからなる魚の形を模したハードルアー、樹脂で射出成型されたワームと言う虫などを模したものがあり、餌に触ることなく手軽に始められることも人気に拍車をかけたのだと思う（現在、環境保護目的でワームの使用が制限されている湖も多い）。

一方で、私の偏見もあるが、流行に乗るためだけにバスフィッシングから釣りを始めたビギナーも多く、一部にマンナーの悪い釣り人も多かった印象

がある。私は言えば、中学生の頃、当時住んでいた地域のダム湖で初めてその魚体を見たのがこの釣りとの出会いだった。社会は見えないうちの釣り人になっても熱量は衰えず、週末には会社の同僚と河口湖に通っていた。その後、一緒にやってきた同僚は、ブームの終焉と共に一人、二人と消えていったが、私の情熱は冷めることなく、岸から湖上へと移った。小型船舶免許を取得し、最初はレンタルボート、その後、バス専用のボートを所有し魚を求め湖上を滑走している。

バスフィッシングは、湖面に向かって無造作にルアーを投げるのではなく、その日の水温、地形の変化など、魚群探知機を用いて肉眼では見えない水中の様子を把握し、魚を探して狙い撃つ戦略の組立てがおもしろい。また、専用ボートの操船も魅力である。それらを駆使して魚をキャッチできた時の満足感は大きい。

現在は、所有していたボートは手放したが、年に数回、河口湖でバスボートをレンタルし楽しんでいる。釣りのできる自然の恵みに感謝しながら。